

[研究区分： 地域課題解決研究]

研究テーマ： 広島神楽の再領域化に向けた実証的研究	
研究代表者： 経営情報学部 経営学科 准教授・和田崇	連絡先： t-wada1969@pu-hiroshima.ac.jp
共同研究者： 安芸高田市政策企画課 専門員 戸田邦昭	
【研究概要】 本研究は、神楽団が所在する集落の秋祭りで神事として行われる奉納神楽について、集落外、とくに広島等都市圏の神楽ファンがそれを鑑賞するとともに、神楽団員等集落住民と交流を深めることを目的としたモニターツアーを試行し、その成立可能性を検証した。その結果、こうしたツアーは参加者および受入地域の双方にメリットがあり、具体化に向けたニーズも高いことが確認できた。	

【研究内容・成果】

1. 研究目的

本研究は、神楽団が所在する集落の秋祭りで神事として行われる神楽について、集落外、とくに広島等都市圏の神楽ファンがそれを鑑賞するとともに、神楽団員等集落住民と交流を深めることを目的としたモニターツアーを試行し、その成立可能性を検証したものである。この試みは、広島神楽にみられる近年の観光化・商品化の動きが、①集落や神社からの遊離（脱領域化，脱埋め込み化，脱神事化），②「創られた伝統」の消費とブランド化，③娯楽性の高い神楽の選択的消費，を特徴とするのに対して，(a)集落や神社との関わりの再構築（再領域化，再埋め込み化，再神事化），(b)神楽の真正性（オーセンティシティ）の再評価，(c)集落ごとの神楽の多様性（ダイバーシティ）の理解，の3つの観点から企画し，検討したものである。

2. 研究方法

本研究の実査は，大学生アンケート調査，現地調査（モニターツアー），事例調査からなる。

(1) 広島神楽に対する大学生の意識把握（2014年7月）

広島神楽に対する大学生の意識を把握するため，県立広島大学（広島市）および國學院大學（東京都渋谷区）の学生を対象とするアンケート調査を実施。回収サンプル数は県立広島大学 244，國學院大學 259，合計 503。

(2) 奉納神楽鑑賞ツアー成立可能性の検討（2014年10～11月）

広島市内の若者や女性が神楽の本場である農村地域を訪ね，神社での奉納神楽を鑑賞するツアーの成立可能性を検証するため，ツアー形式での現地調査を4回実施。現地調査終了後にツアー参加者による意見交換会を実施（2014年12月4日）。

10/11～10/12	廿日市市	6人	安芸十二神祇	伊勢神社，厳島神社ほか
10/25～10/26	呉市	5人	芸予諸島神楽	磯神社，大和ミュージアムほか
11/2～11/3	三原市	6人	備後神楽	大具八幡神社，三原城趾ほか
11/8～11/9	安芸高田市	9人	芸北神楽	桑田の庄，神楽門前湯治村ほか

(3) 宮崎神楽の事例分析（2014年12月）

神楽観光の先進地である宮崎県高千穂町を訪問し，神楽を鑑賞するとともに，神楽観光推進の経緯やポイントを聴取。

3. 研究成果

(1) 広島神楽に対する大学生の意識

大学生の多くは神楽の観光化・商品化に肯定的であり，それを通じて，神楽の存続・発展，地域振興につなげることが望ましいと考えている。こうした傾向は，出身地で神楽が継承され，それに何らかのかたちで関与したり，大学生になってから神楽と何らかのかかわりをもったりするなど，神楽と比較的強いかかわりをもつ者に顕著に認められた。彼らは，神楽を身近に感じ，そ

の魅力や神楽団の実態を知っているがゆえに、その魅力をより多くの人に知ってもらい、神楽の保存・継承や地域振興につなげることを期待している。

一方で、神楽に関する知識・情報をあまりもたない者や、神楽とのかかわりが比較的弱い者を中心に、神楽のもつ神事性を重視し、その保護・伝承に努めることが望ましいと考えている。彼らは、広島神楽に関する知識・情報や経験が少ないために、それを身近なものというよりも数ある伝統芸能の一つと捉え、一般解として、「伝統」であるがゆえに、その神事性・真正性を保持する必要があるとみていると推察される。

現代の広島神楽にとって、観光化・商品化の推進と神事性・真正性を重視した保存・継承のどちらが望ましい態度なのか。これに関して、奉納神楽が行われる秋祭りを訪ねるツアーは、その両方を同時にめざすものであり、今後、広島神楽が有効性を検討すべき取組みの一つに位置づけることができる。このツアーに対しては、神楽所在地域と地理的に近接する場所に居住する者に加え、大学時代に神楽と何らかのかかわりをもつ者、広島神楽を認知し、何らかの知識・情報をもつ者から比較的高い関心が示された。すなわち、このツアーは、従来の神楽観光がターゲットとしてきた娯楽性を求める一般大衆消費市場でなく、神楽に対して文化的関心を示す特定市場を対象とするものと位置づけることができる。

(2) 奉納神楽鑑賞ツアーの成立可能性

モニターツアーを試行した結果、奉納神楽が行われる秋祭りを訪問するツアーは、参加者および受入地域の双方にメリットがあり、ニーズも高いことが確認できた。特に、従来の見学型ツアーに物足りなさを感じている人、共同・協同作業に喜びを感じる人、ローカルな祭りが好きな人、日本の農村に関心があり地域交流や体験を望む外国人のニーズが高いことがわかった。

ただし、具体化に当たっては、いくつかのクリアすべき課題があることも確認できた。第1は、訪問者を受け入れる地域における住民合意である。集落行事である秋祭りに集落外の者が参加し、相互に交流することについて受入地域の住民が了解し、地域を挙げて受け入れる態勢を構築することが重要である。第2は、訪問者の役割を明確にすることである。神楽鑑賞のみならず祭りの手伝い等を希望する訪問者に対して、受入地域側が適度・適切な役割を与え、住民と訪問者が共同で祭りを作り上げる仕掛けを工夫する必要がある。第3は、訪問者が地域に入っていく際の手助けやアドバイスをを行うアテンドを確保することである。地域の実情や神楽の本質、また訪問者のニーズの双方を理解したアテンドが訪問者を適切に誘導することで、理解不足ゆえの衝突を回避し、住民も訪問者も満足を得ることができるようになることが重要である。

(3) 宮崎神楽から学ぶこと

高千穂町では戦後に神楽の担い手が減少し、消滅が危惧される状態に陥ったが、神楽継承に力を入れる宮司の存在、観光客による鑑賞ニーズの高まり、ふるさと回帰ブームにもとづくマスメディアからの注目などもあり、1970年代から、高千穂神社と高千穂町観光協会、各神楽団が協力して、神楽の観光活用を推進してきた。その取組みで注目されるのは、神楽の神事性・真正性の重要性を説き、それを守ってきた高千穂神社・宮司の存在とその指導力である。それによって高千穂神楽の神事性・真正性が保持され、観光活用によってそれが失われたり、改変されたりすることがなかった。その神事性・真正性が観光客にも評価され、継続的に人気を得ている。このことは、広島神楽の観光活用においても、参考にすべき点と考えられる。

4. 今後の研究課題

本研究は、過度ともいえる観光活用が進む広島神楽について、神楽の本質（神事性・真正性）を見つめ直し、神楽とそれが分布する農村地域への理解を深める一手法を提案し、その可能性と課題を明らかにした点で評価できると考える。今後は、神楽継承を担う個々の神楽団員に焦点をあて、神楽にかかわる活動の実態や意識を明らかにし、ミクロなレベルから広島神楽の継承・発展方策を検討する計画である。